第２回　仙台市音楽ホール検討懇話会

日　時　平成30年1月12日（金）　15:00～17:00
場　所　市役所本庁舎２階　第三委員会室
出席者　今井邦男委員、垣内恵美子委員、庄子真岐委員、高田登志江委員、三塚尚可委員、村上ひろみ委員、本杉省三委員、館圭輔委員
次　第　１．開会
２．議事
(1) 前回の議論を踏まえた論点整理について
(2) 設置目的、ねらいの考え方について
(3) 施設像の考え方について
３．閉会
配布資料　資料１　前回の議論を踏まえた論点整理について
参考資料１　第１回仙台市音楽ホール検討懇話会　議事要旨
参考資料２　仙台及び東北県市の将来人口動向について
参考資料３　兵庫県立芸術文化センター　阪神淡路大震災からの復興のシンボル
参考資料４　水戸市：新市民会館　まち活性化を整備目標とした市民会館整備
参考資料５　川崎市：ミューザ川崎シンフォニーホールと音楽のまちづくり
資料２，３　設置目的、ねらいの考え方について
資料４，５　施設像の考え方について

１．開会

２．議事

（会議公開の確認→異議なし）
（議事録署名については、本杉会長及びもう一人（五十音順）の委員に依頼（今回は垣内委員）→異議なし）

(1) 前回の議論を踏まえた論点整理について

○本杉会長
それでは、前回の議事を踏まえた論点整理について、事務局からまず説明をお願いします。
○事務局（株式会社政策技術研究所代表取締役）
（事務局より資料１、参考資料１～５に基づき説明）
○本杉会長
ただいまの報告、説明に関しまして、質問やご意見がありましたらお願いいたします。
何か、補足とか、これは言っておきたいというのはありませんか、垣内さん。
○垣内委員
非常に詳細で、かつ的を射たご説明をいただきましてありがとうございました。
その中でちょっと触れていただきました兵庫芸術文化センターについて私自身も調査をし

たことがございますので、その結果だけかいつまんでお話をして情報共有させていただきたいと思っております。

兵庫芸術文化センターは、毎年、今、数え方にもよるかと思うんですけれども、50万人以上のお客さんが公演にいらっしゃるというふうに聞いておりますけれども、訪問する方はもっと多いらしいのですが、パフォーマンスにいらっしゃる方で50万人を超える利用者が年間いらっしゃるということですので、非常に使われている、そしてまた利用の多い劇場であろうかというふうに思っております。

この劇場さんとお話をしまして、劇場さんが知りたかったのは、来ない人たちに劇場はどういう貢献ができるのか。来てくださる方には、当然芸術的な価値を見ていただく、そういうサービスを提供できますけれども、いらっしゃらない方にはどういう貢献ができるのかというようなことを課題意識としてお持ちになったということもありまして、私のほうでちょっと県民意識調査ということをさせていただきました。

仮想評価法という非常にマニアックな手法を使ったものですから永山さんのほうからご紹介がありましたけれども、手法については詳しくは説明いたしませんが、県民の方々にこの劇場が活動を続けていくためにどのくらいの寄附をしてもいいのかということをお尋ねした結果と、それを統計的に分析して結論を出したものです。結果だけ申し上げますと、県民の方々は、控え目に考えても年間50億円以上のお金を使ってもこの活動を支援すべきであると考えていることが確認できております。先ほどご説明しましたように県費が基金も含めて16億、基金の部分はもう既に従来積み上げたものですから、年間新たに支払うものは11億円ぐらいかと思いますが、これよりもはるかに大きな金額を県民の方々は支払ってもいいと考えている、そういうコンセンサスがあるということがわかりました。

それでは、その理由は何かと。来ないのになぜお金を払おうと思っているのかというところは非常に重要なことなんですけれども、もちろんこのお金を払うとおっしゃった、支援をすると言った方々の中には、よくこの劇場を利用するという方もいらっしゃる一方で、利用したことがないという方々もたくさん含まれておりました。この方々はなぜ、劇場にお金を払ってまで活動を続けてもらおうと思っているかというと、大きくいうと２つあります。

１つは、将来世代への遺贈価値と分類されるものなんですけれども、将来世代にこの活動を継続していってもらいたいと。劇場は、一旦クローズしますとまた再開するというのは非常に難しいものでございますので、この活動を継続していって、将来世代の方々にも劇場に来てもらえるような、そういうふうにしたいという意思が一番強かったと。

２つ目は、これはこの仙台のホールを考えるときにも重要なことかと思いますけれども、まちの魅力を高めるという意識です。意外にこれが多かった。意外にというのも何なんですけれども、非常に多くて、ちょっと驚きました。

兵庫県はご存じのとおり面積も大きくて日本海側まで広がっているんですけれども、この西宮にある劇場が、来ない方々も含めて多くの県民の方々に、いろいろな価値を与えているのだなということがわかったというのがごく簡単なご紹介になります。ちょっと補足をさせていただきました。

○本杉会長

普段劇場に来ない人にどう来てもらうかということで言いますと、この３つの事例にはありませんけれども、京都の新しく京都会館を改修した施設、ロームシアター京都があります。

あそこも今までと違ったような取り組みをしていて、１階にコンビニエンスストアがあったり、あるいはブックショップとかカフェが入っていまして、積極的に劇場を目的として来ない人たちも劇場に近づいてもらおうという取り組みをしていますね。

ここに３つ挙げていただいた事例はいずれも再開発事例で、今言った京都は再開発とは違います。けれども、古い施設をリニューアルして規模を以前よりも大きくした事例としてよく知られている事例です。兵庫は先ほど説明がありましたように、組織的にも財源的にも非常にしっかりしておりますし、震災復興という意味合いからも我々の非常にお手本じゃないかなというふうに思っています。ピッコロ劇団がこの施設ができる以前から、専用の県立の劇団を持っていて、小さな劇場ですけれどもずっと運営をしていて、そういうものが基礎となってその上にこういう活動があるんじゃないかなというふうに思います。

兵庫では、去年かその前ぐらいからですかね、比較的豊かな共用ロビー空間がありまして、そこを使って日曜日のお昼どきに親子連れの無料のコンサートなども積極的にやっています。その劇場に普段来られない、アクセスしにくい人たちもぜひ来てもらおうというのでそういうことをしていますね。

芸術監督の佐渡裕さんもコンサートが終わると必ず入り口に行ってサインをするとかですね、いろいろ楽団の人たちも一緒になってやるとか。札幌のオーケストラの人達も同じようなことをされて、仙台もやっているというふうに聞いていますけれども、そういう点で非常に努力されているんだなということがわかると思います。

ミューザは、地元の企業の方たちが非常に積極的に支援してくれていて、大学との関係も良いですね。客席天井が落ちた後は、大学の施設も利用したり、いろいろなところでやっていましたね。そういう大学との関係、地域との関係という面で参考になります。垣内先生も川崎に非常に深くさまざまな形で関わっていらっしゃいますけれども、川崎は非常に細長い地域でイメージが全く違って、海側のイメージと内陸側のイメージは住民の気質なんかも違うような感じなんですけれども、それがこのミューザ川崎以降、音楽的な活動によってうまくまじっている感じがしますね。そういった事例として非常に興味深いのではないかというふうに思います。

その他ございますでしょうか。よろしいですか。

では、議題１につきましてはこれで終了したいと思います。

(2)設置目的、ねらいの考え方について

○本杉会長

続きまして、議題２のほうに移っていきたいと思います。

議事２の設置目的、狙いの考え方について事務局からご説明お願いいたします。

○事務局（株式会社政策技術研究所代表取締役）

（事務局より資料１、参考資料１～５に基づき説明）

○本杉会長

わかりやすくまとまっているんじゃないかと思います。言葉は皆さん少しずつ違うかもしれませんが、ここに今説明があったような考え方ができるのではないかというお話です。これに関しましてご意見や質問等ございましたらお願いいたします。いかがでしょうか。

今井さん、いかがですか。

○今井副会長

大変結構だろうと思います。とても広くいろいろ考えてくださっていると思いますし、一番上に実演芸術ということから始まっている。この芸術の特徴は、その場で消えてなくなる芸術ですよね。音楽も演劇も、全ての実演芸術はその一瞬で消えてしまうものなんですね。何が残るかというと、記憶が残るんですよね。名演奏、感動みたいなものが残っていくときに記憶として残って、その記憶が、人間の成長とともに記憶も成長するというか、そういう話を読んだことがありますし、だからすごく深い感動はもう一生その人間を育て続けるというか、そういうことが僕は音楽や実演芸術のとてもすぐれたところだと思いますし、そういう人間を変えていく機能ですね、そういうものがこの新しいホールの中に含まれることを願っています。

本当はそういう機能はホールが大きいとか小さいとか関係ないことなんですけれども、ホールが2,000名必要とするというのは、むしろ非常に便宜的な、ある種のもっと違う観点ですね、経済的な観点であるとか、あるいは施設が大きくなければできない公演など、僕らもたくさん抱えているわけですよね。吹奏楽も合唱も、毎日やるわけじゃないけれども、年に数回、それがないとできない舞台があります。そして、大きな企画がその場所で行われて、それを経験する子どもたちがそれを一生自分の中にためていくというか、そういうことが数年来仙台市はやれていないわけですよね。数十年を無駄にしてきたわけですね。そういう点で今回本当に期待していますので、よろしくお願いしたいと思います。

○本杉会長

その他ございますか。三塚委員、お願いします。

○三塚委員

今井先生のお話を聞いていて、私も同じような活動をしているものですから大体同じなんですが、とにかく素晴らしい音楽をみんなで共有して感動している。そういうことが積み重なって、そこから何か新しい文化が生まれてくるのではないかと思うんです。最近外国に行く機会があり外国のオーケストラ、たとえばベルリンフィルでありますとかゲバントハウスでありますとか、そこに2000数百名の皆さんが一堂に会して感動を共有している姿はもの凄いことだと思います。もちろん今井先生のおっしゃるように感動は人数には関係ないようにも思いますが、逆に私は大勢の方と感動を共にすることが大変大きいことだと考えます。仙台ではそのようなことを感じたことはありません。出来るだけ多くの方と感動を共有出来るそういう場面をつくってほしいと願っています。

○本杉会長

その他には、いかがですか。庄子さん。お願いします。

○庄子委員

６つの機能というのをお示しいただいたんですけれども、今までのご議論の中で、この施設が求められるとか、この施設に対するニーズというのをすごく広く捉えて盛り込まれた機能になっていると思いました。

私少し理解不足で、①番と③番の違い、①番もある意味文化力を発揮している、発揮する場のところなのかなと思うと、①番と③番をあえて分けたところというのはあるのかなと思いまして、そこをちょっとお聞かせいただきたいなと。

○本杉会長

それでは、お願いします。

○永山株式会社政策技術研究所代表取締役

①番の機能というのは、先ほど申しましたように、ホールの舞台上でさまざまな公演が演じられる、あるいは市民が上がってそこで発表をする、それを鑑賞する、この流れというのはずっと文化芸術振興のメーンストリームとしてあったんですね。それは主要な文化力発揮の一つといえます。

今、ここで文化力という言い方をしているものは、舞台上で公演し、鑑賞することも文化力ですけれども、それだけでなくて、もう少し違う働き、作用をするという文化芸術の持つ力を示しています。先ほど今井先生のお話にもありましたが、例えば市民とプロが一緒になって何かをつくろうとする、そうするとプロは自分のすぐれた技能を表現として発表するだけではなくて、市民の普通の人が持っている創造性やすばらしいところを引き出していくことにその能力を発揮していくということがあります。

今回の、復興過程で発揮された音楽の力ということも、プロの人たちが市民の持っている心の中にあるものを引き出したというところが大きな役割だったと思うんですね。こういうような部分の役割、これはよく言われるようなワークショップであったり、あるいは様々な場所で行われている復興コンサートもそうですが、そういうコラボレーションをプロと市民がしていくような活動から生み出される力というのがここでいう文化力と考えています。あるいはプロが介在せずに市民自身が行う活動にもこの力はあるのですが、この辺のところに注目して、その発揮を考えています。その力というのはさらに、福祉領域とか教育とか、そういう中でも生かされていくのではないだろうかと。これは、特に介護などで、音楽療法とも言われますが、そういうものに使っていく。これは、まさに文化が持っている力をケアの中に取り込むことで、より効果的にしていこうということがありますね。こういうものをあえて文化力発揮というような捉え方をしている。

ですから、鑑賞とかそういうところがもっている文化芸術の力も文化力なんですが、ここではそういう区分けをさせていただいたというふうに思っております。

○本杉会長

①番が良質な文化そのものをつくっていく、あるいは良質な文化によって恩恵を受ける場面をつくっていくという意味だと思うんですね。

それに対して、③番というのは、ここに包摂という言葉もありますけれども、文化的な活動、芸術的な活動を通じて、何か人々に勇気を与えたり、芸術文化そのものとは少し違う影響力を与えていくこと。今、教育という言葉がありましたけれども、日本語で教育と言うと何か学校教育につながるところがありますけれども、演劇を通じた教育プログラム、あるいは音楽を通じた教育プログラム、ダンスを通じた教育プログラムというのはヨーロッパに行くと非常に盛んで、必ずそういう専門家がいるんですね。プログラムを企画する、そして実施していく専門家とは別に、そういう子ども向けのプログラムを何かそういう専門家がつくっていく。あるいはある施設に出かけていって何かをやる、あるいはその施設が特別な、例えば精神的にちょっと病んでいる難しい場面をつくっている人たちに来てもらって、その人たちと一緒に何かすることによって社会とのつながりをつくっていってあげるとかといった、直接的な活動じゃなくてそれを通じて何かできる、そういう場面をつくり出していくという

のが③番の活動だと思うんですね。そういった意味で、ここで分けてくれているんじゃないかなというふうに思います。

○庄子委員

それでは、芸術を手段と考えるということですか。

○本杉会長

手段と言うと何か少し悪い影響を与えるような、少し偏った感じがするので、それを通して何かいろいろな場面をつくっていくということじゃないかなというふうに思います。

○庄子委員

この一番上に書かれている震災復興過程で発揮された音楽・芸術の力を発展させていくとかというのは、まさにここに入ってくるところですか。

○本杉会長

そうですね。

○庄子委員

そうすると、例えば仙台であれば、この震災復興過程で培ってきた音楽の力をかりて復興してきたというのを、例えば機能として強めていきたいんであれば、ここの文化力発揮機能のところを強くしていくことが必要ですか。

○本杉会長

それはとても重要だと思うんですよね。多分、いわゆる建築的な部屋としては余りないのかもしれませんね。ある程度、例えば①番のようなところの部屋というのは非常にはっきりしていて、舞台だったり客席だったり、そういうところになると思いますけれども、③番はどこに部屋が必要なのかというと、特別にこういう部屋が必要とかということはないのかもしれません、もちろんある程度は必要だと思いますけれども。

それが活動として表に出てくる、そういう意味で施設をつくる、あるいは施設の中に組織や運営する力というものも一緒に含めていますけれども、日本語で施設と言うと何となく建物だけになってしまいますけれども、組織とか人とかお金まで含めた意味での施設ですね。そういうふうに捉えると、ここでの目的というのが理解できるんじゃないかなというふうに思います。

○庄子委員

ありがとうございました。

○本杉会長

何かありますか、垣内先生。

○垣内委員

私は、この機能がとても重要なことだろうと思うんですね。どうしても、劇場と言うと、今おっしゃったように、ハードの、目に見えるもの、空間・建物というものをイメージするんですけれども、実はそういうものは何をするためのものなのかということを最初に考えて、それに合わせてつくっていかないと期待される成果が十分出ないんではないかというふうに思っているものですから、この概念整理ってとても重要だと思っております。しかも、非常に、何というんでしょうか、一番最先端を行く概念整理になっているんじゃないかというふうに思っております。

というのも、公立の文化施設、劇場というのは、皆様御案内のとおり、まず最初は集会施

設の公会堂から始まったというふうによく言われているんですが、その後、各地ですぐれた芸術作品を舞台で聞きたいというニーズが高まって、たとえばＮ響（ＮＨＫ交響楽団）さんに来てもらいたいとか、そういうようなことがあって、文化施設、文化会館というんですか、文化センターというものが各地にできてきた。ただそのときはいろいろな目的に、クラシック音楽もできるし、例えば演劇もできるし、集会もできるというようなことで、いわゆる多目的ホールというのができてきたというのが60年代、70年代のことだと思うんですけれども、そうするとご存じのとおり、クラシックのいい音楽を聞きたいときにはやはり音の響きとかいろいろな条件が必要なんだけれども、例えば集会で人々がお話をするためには余り響きが強過ぎるような空間だとうまくいかないということに気づかれて、80年代以降、いわゆる専門性を大事にした、クラシックならクラシックのためのホールをつくろうと、オペラだったらオペラのためのフライタワーがあって立派な施設をつくろうとか、そういう動きになってきた。

それは、いろんな社会的なニーズ、人々のニーズに非常に合っていたと思うんですけれども、私が見るところ、90年代から21世紀にかけて、技術力も高まりましたし、ニーズも非常に多様なものを包含しなければならなくなりましたので、集会もできる、いろんな目的に使える、でも専門性が高い、地域に開かれた、しかもさまざまなほかのまちづくりとも関係するような拠点をつくってほしいというような社会的なニーズが今すごく高まってきた中、今回のこの機能整理になっているんじゃないかというふうに思います。

かつては、この①の機能が主要だったんですね。それが、それだけではなくて、もっと練習機能とか、リハーサルができ、また市民の方も使えるような機能をつけていくというところにだんだん移ってきて、それから文化力というところまで気がついてきたのが前世紀特に阪神・淡路大震災ぐらいのときに非常にはっきりと、くっきりとわかってきたこと、そして、今回は④から⑥まで、人材育成とか交流機能とかまちづくりといったようなことも含めて、今、仙台市がやるのであればこういう機能も必要だというご提案であろうというふうに理解いたしました。

文化力とまちづくりもかなり接近している部分もあるんですけれども、やはりハードの側面もありますので、まちづくり都市計画との関係、都市景観の中での考慮も必要だということで特出しにされているのかなというふうに理解いたしました。

私が特に重要だと思うのは④の人材育成でありまして、今までは舞台、ステージをつくっていくという人たちをできるだけ育てていこうということだったんですけれども、今、永山さんからご説明がありましたように、それだけではなくて、交流人口、特に仙台という東北の中核都市として世界からお客さんに来てもらうということであれば、多分舞台をつくるだけの人材では十分カバーできない。今回はこの部分にも踏み込んで何か機能をつけていこうというお話、ご提案なのかなというふうに思います。

そうであれば、そのために必要な空間といいますか、手当ても必要になってくるんだろうということで、この機能整理に皆さん方の、あるいは仙台市民の関係者の思いが一応これに全部入っているかどうかというのをここで確認するという作業が必要かなというふうに思っております。私は仙台市民ではないのですが、ここ何回か仙台市の、特に中心部だけですけれども、歩かせていただきまして、いろいろな都市を見ていますけれども、仙台中心部は非常にコンパクトで緑が多くて、成熟した、上質な、豊かな高さを感じる都市だなというふう

に思っております。なので、今、仙台市がつくるのであれば、そういう、これまで築いてきたこの町の雰囲気も全部抽出できるような機能をきちんと盛り込んだ、そういう文化拠点になってもらいたいなというふうに思いました。

○本杉会長

村上委員、いかがですか。

○村上委員

素人で申しわけないんですけれども。少し話が前後してもよろしいでしょうか。

○本杉会長

はい。

○村上委員

参考資料の２の人口の推移を先ほどから見させていただいて、改めてこの仙台市が、他県、先ほどお話ございましたけれども、他県ないし他の市とは、東北の中ではですね、比較して人口の推移が大変緩やかに縮小していくわけなんですが、そこはある種ほっとはしてはみているものの、一方で14歳未満ないしは労働力人口が2015年対比2030年で84万人から77万人と７万人の減少であり、かつ、65歳を今高齢者と言うかどうかは別として、65歳以上がプラス万人、15年から30年の対比でございまして、ちょうど、前回のお話ですと、ホールができます今から10年後という話ですと2027年ないし28年ということは、ちょうど2030年のところを見てよろしいかと思うんですけれども、そういった意味では、緩やかな縮小ではあるものの、それにしても縮小しますよと。かつ若い人が減ってきますよと、若い人というのかな、労働力人口が減ってきますよという中において、まずは日本の中で美しい求心力のあるホールないしは仙台市であり続けるというところが大切かと思います。

その中で、この６つの機能は全て果たして必要なのだろうかと。とても、強弱をつける必要はないんだろうかと、ないしは仙台市の持つ幾つかのホール、前回の主要ホールが、県も含めていろんなホールないしはプラザがあるわけなんですが、仙台市の中でその機能を分担することはしなくてよろしいんだろうかと。

今、何を目的で話しているのかというと、そもそもの財源の問題と、あとスピード感の問題と、仙台市としての何を、仙台市の今回のものは、６つ全ての機能があればいいんですが、何を優先させるかという観点、ないしはほかのホールとの連携という観点においてそこは考えなくてもいいかと。単独の一つのホールで全てを賄うということは、今の時代、これからの時代難しいんではないかと。先ほどの人口の推計から見て、少し疑問を持ったんですけれどもね。すみません、全く違う観点になってしまうんですけれども、分担できるんではないかと。

○本杉会長

例えばどういうところをどういうふうに分担したらいいかということですか。

○村上委員

ほかのホールではちょっとわからないんですけれども。

全て１つのホール、１カ所の中に全部入れるということというのは、入れるというか、考え方的には十分理解できるんですけれども、しかしながら、既にある既存の資源をどれだけ有効活用できるか、分担できるかということを、ポートフォリオを改めて考える必要はないのかなと。その中での今回の美しい新たなホールという、そういった物の考え方の起点のと

ころを加えていただけたらなと思った次第です。

○本杉会長

今、私の理解では、①から⑥までありますけれども、①から⑥が全部同じボリュームじゃないと思うんですね。それから、施設に関しては、先ほども申しましたように、部屋とかが必要なものが全部にあるかというと、そうでもないわけですね。やっぱりこの中で一番大きな、中心的な活動機能というのは①番になることは必然だと思うんですね。そこの良質化、あるいは上質化によってほかの機能というものが高まっていくというふうに見てとれるように思うんですね。ですから、何かをなくしたからといって経済的に何か安上がりになるとかという、そういう問題じゃないように思いますね。

おっしゃるとおり、いろんな関連した施設、あるいはこの１つの施設、あるいは組織で何でもやるんだという、そういうことはもともとできないわけですので、一人で抱えないことというのはとても大事なことじゃないかなというふうに思いますけれども。

○今井副会長

先ほど先生のお話にも上がったのですが、多目的ホールが、どこもいろんなところが多目的ホールで盛んにつくられていた時代で、それがやっぱりだんだん少し、音楽専用ホールであるとか何々専用ホールと、そういう時代が来ましたね。もう一遍、今、この時代にどういう方向にいかなければならないかということが、僕が一番心配しているのが、やっぱり先ほど、今度つくるホールの肝、一番大事なのは何かと、それを外さないようにしていきたいというようなことなんですけれども、委員長先生がさっき技術力も上がってきているのでいろんなことが、前より随分解決できるようになってきたというようなことですけれども、専門性みたいな、クラシックに一番有利な音響というか響きとか、そういうものを維持したままほかの機能もできるようになっていくというようなことは相当技術力として今可能になってきているんですか。例えば20年前と違っているとか。

○本杉会長

それは明らかに向上していますね。

それで、どこまで厳密に言うかというのは難しくて、例えば、極端な話ですけれども、ルーブル美術館みたいなものと市民ギャラリーを一緒にできないのと同じで、やはり非常に専門性の高いものとそうでもないものというのは区別されてしかるべきだし、どこを目指してその施設なり組織なりをつくっていくのかということによって満足できるレベルというのは変わってくるんじゃないかなというふうに思いますね。

明らかに、技術力は非常に高まっています。

○三塚委員

私も質問しようかなと思ったんですけれども、実は多目的ホールのような感じも少しするわけですね。すばらしい音響のホールをつくるということと、いろいろ考えてみますと、多目的ホールの機能も皆持っているわけですね。そこで、今井委員と同じように、少し違うんじゃないかなというふうに感じました。

仙台市内にも、各区にそれぞれ多目的ホールは皆お持ちですね。泉区はイズミティがありますし、太白区は楽楽楽ホールとか、どの区にもみな、パトナもあるし広瀬文化センターもあります。そういう多目的ホールはあるので、そういうことと今回の音楽ホール、何といいますか、音響のすばらしいホールというんですか、そういうホールと分けて考えていかない

と、全部これの機能を一緒にするというのは、論理的には非常に必要なことだと思うんです。でも、どこに強弱を置くかということになれば、先ほどから会長さんがおっしゃられるとおり、やっぱり①がメーンでということになって、そのほかももちろん念頭に置いてやっていくべきだとは思う。とても、そういう意味では兵庫文化センターのやっている成功例と非常に似ている内容ですので私はすばらしいなとは思うんですが、ただ強弱はつけてほしいなと思うわけです。

○本杉会長

もう一つの議題がありますので、それが関連してくるのではないかと思います。

(2) 施設像の考え方について

○本杉会長

３番目の施設像の考え方について、事務局から説明お願いいたします。

○事務局（株式会社政策技術研究所代表取締役）

（事務局より資料１、参考資料１～５に基づき説明）

○本杉会長

では、今の説明について、施設像の考え方についてご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

○三塚委員

先ほど、リハーサル室のことがちょっとありましたけれども、やはりオーケストラでありますとか、私たち吹奏楽でやってるんですが、場所を結構とりますので、100人ぐらいの人数でリハーサルできるような、そういうリハーサル室も必要なんじゃないかなというふうに感じます。

贅沢であればもっと、各、打楽器の練習室、それから管楽器の練習室とか分かれているのが望ましい。ベルリンなんかはそうなんですけれども、そこまでいかなくてもいいですけれども。

○本杉会長

いかがですか、今井委員。

○今井副会長

練習室を少し大き目にというのはとてもありがたいことですね。確かに、仙台市、現在、そういう練習室に使える市民会館みたいなところは、小さいグループは割といろんなところで、もちろんサイズの問題もあると思うんですが、少し大きくなると選びますし、とるのに混んでいるんです、とてもとれないんですよね。１年も前からちゃんと、その都度かなりの、しかも抽選でやっていかなくちゃいけないので、こういうアイデアはとてもありがたいですね。

もちろん、我々も、大きなホールで演奏するための、ワークショップや練習も含めて、そういうことは十分にできるような施設でないと、何か現代的じゃないといいますか、新しくないというか、そういう感じがします。

○本杉会長

主ホールを音楽の専用ホールではなくて高性能な多機能ホールにしようという考え方なんですけれども、これについてはいかがですか。さまざまな活動を考えますと、こういうふう

な考え方は自然なのかなというふうに思いますけれども。

○庄子委員

私は、音響を重視した高機能な多機能ホールというが、持続可能性の観点から考えると一番いいのかなというふうに思っています。もし専用ホールにしてしまいますと、もちろんそういったニーズもあるとは思うんですけれども土日の利用に偏ってしまうというところが大きいのかなと思いまして、それを支えるためには、舞台・演劇ではなくて、例えば会議、今ＭＩＣＥと言われているものですが、ＭＩＣＥが開催できるようなホールでありますと平日の需要というのも見込めますので、そういった観点からすると、施設をずっと継続的に存続させていくためには多機能ホールのほうがいいのかなというふうに考えます。

○三塚委員

先ほどの話になりますが、多機能ホールということと素晴らしい音響のホールということが両立するかどうかというのが非常に疑問に思っております。ただ、最近の技術では可能ではないかという先生のお話もありましたが、出来れば音響を重視してほしいということであります。どうして多機能になったかということを考えますと、オペラの上演とかが念頭にくるわけですけれども、回数は少ないと思いますがそのことも残しておかなくてはならないので多機能ではありながら出来るだけ音響重視というのがいいのではないかと希望します。

○今井副会長

僕なんかは、絶対的な条件はやっぱり生の音源ですね。生の音源の響きがどれぐらい本格的かという、そこさえ担保していただければ多機能であっても構いません。

○三塚委員

先ほどから音響と言うけれども、生の音源のことであって、電気を通したものではないと思います。

○今井副会長

それは全然問題外です。

○本杉会長

問題外というか、そういうものもできる、両方できるということですね。それはしちゃいけないとかって、それはできないということじゃなくて。

○三塚委員

電気のものは、サンプラザとか。

○本杉会長

クラシック音楽に関しては、電気音響じゃなくて生音でやりましょうと。ポピュラーは電気音響を使ったものもここで上演することができますという、そういうことじゃないかなと。

○三塚委員

音響がすばらしいというのは、電気機能を使わない。

○本杉会長

例えば、クラシックの場合の生音ということですよね。

○三塚委員

そこがベースだと思いますので。

○本杉会長

それは兵庫なんかでもやっていますし、日本で非常にたくさんの経験があるので、それな

りの信頼感のあるものはできる可能性を持っていると思いますね。

高田委員、どうですか。その他ございますか。

○高田委員

全体的に、市民という概念が、垣内先生のご持論を伺ったら、もう少し大きく、仙台市民ではなく、世界の市民と言ったらオーバーなんですけれども、少し概念を広げたほうがよろしいのかなと思うんですが。

○細井文化スポーツ部長

それは広くても、全然問題ないと思っております。

○高田委員

そうすると、仙台市との姉妹都市とか、いろいろありますよね。そういうところにも働きかけるとか。あと音楽大学の誘致みたいなのもこれから10年あればできるのではないかと思うんですが。そうすると、なかなか広がりが出てきてよろしいのではないかと思いました。

そうすると、今、ご議論なさった設備の問題とか運営の問題とか、そういうものを90％か95％ぐらいの割合でクリアしていくのではないかと簡単に思った次第でございます。

○本杉会長

ありがとうございます。その他はありますか。

○垣内委員

私自身は、やはりホールはできるだけ使っていただくということが大事だろうと思っております。もちろん、専門性が高くなければ使っていただけないので、そこは必要条件だろうと思いますけれども、それだけで十分とは言えないと。だから、高機能なホール、音響重視のホール、これは前回の資料の中でも、仙台でほかの劇場さんが、例えばライブの電子音楽とかの劇場として非常に利用されていると。そのほかの幾つかのホールとの役割分担を考えたときに、生音の音響のいいホールというのがちょっと空白地帯であると、だからこそこれを埋めようというお話だったと思うんですね。それは非常にリーズナブルだと思いますので、高機能な音響を備えた、専門性も高い、しかしクラシックとか、そういう生音だけに限るのではない、現在の最高水準の技術を使って多様な使い方も排除しない、そういうホールというご提案というふうに理解いたしましたので、この資料５のメーンホールにつきましては、音響重視の多機能なホールということは非常に仙台にとっても重要な選択、いい選択ではないかというふうに思います。

兵庫のときも、震災の前は、非常に大きな、オペラができる専用ホールを考えた時期もあったというふうに聞いておりますけれども、そうすると兵庫でオペラをやるってそんなに回数が多くないものですから、オペラ仕様につくってしまうとほかのものはなかなか使いにくいということがあって、クラシック仕様でオペラもかけられるという形になったというふうに聞いておりますので、そういう先進事例も踏まえていいものができたらいいなというふうに思います。

○本杉会長

時間になってまいりましたが、これだけは言っておきたいということがあれば。

特になければ、これできょうの議事を終了したいと思います。

３．閉会

○事務局（文化振興課長）

活発なご議論をいただきまして本当にありがとうございました。

事務連絡になりますけれども、議事録でございますけれども、今回は本杉会長と垣内委員ということで、署名の前に、また議事録案を、皆さんご発言がございましたので、皆様全員にご確認をいただいてからご署名をいただきたいというふうに思っています。

それと、ご案内のとおり、１月27日に、この検討委員会の関連ということで初めてのシンポジウムを開催いたします。委員の皆様にはご案内状を送付しておりましたけれども、１月27日、日立システムズホールですね、地下鉄駅の旭ヶ丘駅のすぐそばの青年文化センターという施設の２階の交流ホールという場所で開催を予定しております。大変お忙しい時期かと思いますけれども、ご出席をいただきますようによろしくお願いをしたいというふうに思います。

それでは、以上をもちまして第２回仙台市音楽ホール検討懇話会、終了いたします。